

昭和二十年々頭の 文樂座

五松園主人記述

元月初日めでたく開演したる淨瑠璃城文樂座、最初の外題は

◎出陣 (西亭作詞並作曲、煤茂都陸平振附)

巴御前	(相生)	吉五郎	榮三郎
木曾義仲	濱大	喜左衛門	光藏
郎黨	(津磨)	清二郎	多二郎
ッ	八十太夫	新三郎	紋太郎
レ	松島太夫	仙太郎	軍兵大ぜい
	和太夫	叶太郎	

新作出陣には多大の期待をかけ居たるに或る事故の爲遅刻したれば概説して外題の内容を紹介し、床本抄を掲記して批評に代ゆ。

▼暴戾なる平家追討の令旨を受けたる木曾義仲の出陣に取材し、配するに勇にして美なる巴御前の奮戦を潤色し前段を能舞臺とし巴の切なる旨を容れて出陣を許す義仲が首途に當り、とも／＼天神地祇に征戰完遂の祈願を爲す一條を第一景に置き。後半は木曾軍が必勝信念の下磯波に俱利迦羅等に寡兵よく大軍を破りたる合戦の模様を巴御前の物語りの或は寫實的に秋の高原の舞臺面を背景として夢幻的化したる一小史傳の所作物なり。大敵と言へども恐れぬ必勝の信念、敬神尊祖の美德、また勇なる中に情に篤き皇軍の武士道精神を不知不識の中に昂揚する新作新文字！。

▼床本抄 今ぞ時得し出陣の、今ぞ時得し出陣の、壽永の秋の嬉しさよ。されば保元も夢の跡。雨露に幾年木曾木立。今日ぞ錦の晴衣、こ

れは清和源氏の嫡流、木曾冠者義仲にて候、さもて平家の一族、月に浮かれ花に戯れ、奢侈專横に四海亂れ、我輩暴戾に宸襟を惱まし奉る事、沙汰の限りあるべき所畏くも今度、逆徒追討の令旨を賜りて候さらば疾く出陣致して叡慮を安んじ奉らばやと存じ候(中略)皇威に背く逆徒ばら鎮め給へと祈願ある。軍を進めて東國や轉々伊勢路の惡鬼共、その時田村將軍は、其の時田村將軍は、無勢を以つて鬼神が中無二無三に割つて入り、八面六臂の勢に、惡鬼忽ち亡びけり。人間業にあらずし、神の御業に外ならず、神の御業に外ならず。これぞ八洲の神軍、これぞ誠の神の國。御加護の程ぞ畏けれ、いざ／＼故智に我れも亦。尊き令旨を畏みて、今出陣の門出に祈り拜せん萬神、祈り拜せんよろづ神。

◎伽羅先代萩 第六

▼竹の間の段	源大	鶴喜代	光次
▼御殿の段	松之輔	政岡	龜十郎
友衛門	八政	沖の井	光造
仙糸	小沖	牧	小紋司
重大夫	榮御前	多門造	三郎

重大夫は明治二十四年十二月二代目竹本越路大夫(後の攝津大椽)に入門、修養鍛錬舞臺生活の永き事現樽下古靱大夫(明治二十二年三月七日竹本綱大夫に入門)と相伯仲の樽下有資格者の美聲を以て聞へしが本年七十五歳はつきり聲量と體力の衰頽を確認せしめた。併し淨瑠璃は聲を威張るものにあらず又體格の偉大強健を誇るものにあらず、聲自慢の力を有し乍ら其れを使用の技術に熟達せざるべからずなど云ふは重

大夫に對しては釋迦に說法……時は今、大戦争の頂點。攻勢轉移の緊迫時なり。武力・經濟・思想に克服せねばならぬ折も折。鶴喜代君の糧食問題は直に國民の體力思想の問題に影響する喫緊事である。日本一の重大夫は總決算を茲に語込み聽衆に徹底せしめたか納得せしめたか。決戦下大威張りの淨瑠璃人形片居を文樂に持あぐませては國家保護の恩恵に報ゆる途に背く事になる、私利利害にあらず公的君國に盡くす道を深く考慮すべき義務責任が因協會にも文樂にも出演大夫三昧人形にも當然ありと思ふ。鶴喜代の辛抱を見て直に自己克服の助けとし反省の鑑と仕たきものである。其の語方が即ちちそれでなくてはならない、破裂する程の熱湯がたぎり突貫く程の擧げ力が汎濫して居たきものなり、而かもそれが男まさりの女性政岡の性格を壊してはならない。戦時淨瑠璃の究極、藝の最終點は茲だ、これで人を感動せしめ、世を救ふべきである。團平流が漸次滅亡し今日にては仙糸、助三郎の二人が日本に残つて居るのみ、自重を望む。

◎假名手本忠臣藏 第七祇園一力茶屋の段

由良之助	力太彌	喜太八郎	彌五郎	仲居	仲居	仲居	亭主
大隅大	津磨大	源大	濱大	松島大	伊達大	八十大	呂和大大
夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫
玉	文	藤	玉	大	大	大	常
枝	郎	太	枝	十	十	十	次
助	助	助	助	助	助	助	助

伴内	九太夫	平右衛門	三味線
司富	重大大	相大大	吉大大
左衛門	五郎	八郎	喜左衛門
龜門	松	造	德

由良之助は更に晝行燈式を發揮せぬと邪智深き九大夫に大事の計畫を看破されはせぬかと氣遣ふたが幸ひ老練なりと雖も九大夫がそこ迄の肚を持合せざりしものゝ如く杞憂であつた全く僥倖。が作意は「四十に餘つて色狂ひ馬鹿者よ氣違ひよ」に聞かすべきであらう。兎に角九大夫は一筋細で行かぬ奸獪邪智に抜さん出て居り、由良之助がゆら／＼して居れば其の對照一段と面白くはあるまいか？茲が即ち藝であり作家の期待にあらざるべき歟一考を要せん。力彌は輕い役と侮りカキが輕卒に過ぎた無論後人が語路に合はして加筆せし贅辯であり、不斷力彌の憤激が思はず出たとも云はるべきも直前に「急用あつてか密かに／＼」と父由良之助が注意する其の言下に大聲力タキは大事の場面に動搖を起す不謹慎輕卒の力彌である。更に重き役を受持ち勉強鍛鍊錦衣郷に歸り昭和の淨瑠璃藝術家となり得たる立派な誇りを見せねばならぬ長州男兒にあらずや、刻苦徹底的研鑽を望む。次ぎに彌五郎。三四方から吟味打診して先づ斯界の寵兒、勉強次第で先考津大夫を凌駕し得るかも知れぬ器量がある。無論聲が入る……頭が第一、青年大夫の第一人者……大機晩成を禱る。

おかるは文樂一の聲量家と稱する人あり、或は然らん。大夫は聲がもとである、而かもそれは天品に鍛鍊を加へたもので遣へば遣ふに従つて無限に出て來る豊富なものであつてほし

い。おかるは未だ左様な榮耀は云はれない、東京で素的な好
評なれど大阪ではそれ程でもなく土音が素義臭いと云ふ評判
幸ひ相三味喜左衛門丈が皮肉家であるから聲に偏せず技藝圓
熟完成せば偉大なる者であらう。精進々々。九大夫は櫓下金
杉古鞍に續く古參者稀有の美聲家、聲をつくりてかみ殺す様
に聞ゆ故に人形の性格が違つて來る、多年の經驗に徴し是非
工夫を望む。平右衛門は他の何役に對しても遜色なく役前結
構と評論して善し、要するに各々非常の凸凹差隔なく相應揃
ふてあつたから掛合としては先づ無事平穩と云ふべし。

千歲南部大夫重造市
翁住大部大夫重造玉門造市

富 大 夫
猿 二 郎

淨瑠璃人形芝居の基根とされてゐるが、誰彼の差別なく皆三番
叟の人形に喰はれて了つた。成程文樂座（本家）が人形淨瑠
璃と觸れ出す理由根據が解つた様な氣もした。大夫も三味線
も憤激せねばなるまい。人形の改革は時を爭ふ緊要事である

築地の段 雄大

維
大
火

廣助

寺入りの段
宮大

宮
大
夫

第八系

松王首實檢の段
切古鞞大夫

古
鞞
大
夫

清六

雪月
秀
上江

片江

三

涎
く
り

9

萬
次
郎

六代

3代

文
五
郎

人
二
十

1

シ
ル

三源玄松御請希菅
助藏王梅
兵龜玉榮小紋玉門
次松德三吉郎市造
武部源藏夫婦は菅相蝨の一子菅秀才を救出するを以て菅公か
ら被りたる報恩の萬分一と梅玉丸と協力無事目的を遂ぐる場
面、廣助の糸を得て見事了演した雛大夫は殊勲者の内に入ら
う。出来る事なら本業一途に邁進せん事を望む。

延享三年八月二十一日竹本座初演に於て竹本島大夫この四段

目を語り好評を博せし以來毎に名匠の所演にて屈指の佳作と
 持流行さる、記者は二代目大隅、二代目或各(大象)三代目或各

藝術院受賞の名譽者豊竹古靱大夫以外の大家を聞かす。大隅

は一時二十分。大椽、越路は一時二十五分乃至四十分、古鞆師は前清六時代より大隅同様位と覺へしに今回は一時三十五

分を要したりと覺ゆ、蓋し文章の意味模様を語り人形の性格

を拵せんとするは時間の延長は止むを得ざるべき歟。それは兎に角、文章の一字一句に注意しある事。例へば色、地色

その他語り貫く所、又は語り捨つる所など前代未聞の淨瑠璃

藝術家と稱すべきなり。然し乍ら百人竿頭一步を進めて其の女房役たる清六丈の三味線に就いて云はしめよ。素人耳には

素氣なく意味不鮮明、床上の姿勢何となく甚だ水臭き感あり

と多少の遺憾を禁じ得ざりし。惜矣哉く。

◎ 武田信玄
長尾謙信

本朝廿四孝

十種香の段
七五三大夫

琴寬綱寬
治
弘造郎

勝八瀧謙白
重垣
須文
頼姫衣信賀治
玉文紋小紋紋
五兵太
助郎吉司郎次郎

小白
文須

兵紋
太
次郎

南部は東京で聲をとられたとの噂あれど大體それ程の美聲でない天性で修行も未だ積んでは居ない大夫なるが故に近代の名人攝津大椽の十種香が耳にある者は決して左程に敬意を拂はざるべし。例へば「翅がほしい、羽がほしい、飛んで行きたい知らせたい、逢ひたい見たい」などの邊を一意にやつたと云はれる大椽の息を知つて居るや、修行したか實現し得るか。茲に大椽の値打ありて比較になり難きものであらう。寛治郎は文の意味、人形の動作を彈かんとして頭や體の動搖が目障り考慮すべきであらう▲狐火は七五三の聲が自由を束縛されたかの感あり、これは大夫の活躍に任せ天品の限りを盡くさして遣りたいものぢやが、それには自ら程があり又修行が入る。所謂テツを云爲するは野暮の極と一笑に付する今日なれどこれが風格氣品に影響する以上は此の矯正は絶対的のものであり、藝の生命保全である。七五三の成否は寧ろ糸綱造師の責任にあると思ふ。精進大成を望む▲喜壽文五郎の八重垣姫、千代。七十六歳の榮三の松王などは共に至寶であるが惜矣哉續く者なし、紋卜郎のおかる、玉助の火星は一座に傑出して居た。快氣した門造の九大夫も目出度く、成る程人

形淨瑠璃といふも無理からざる事歟。

十八頁よりつづく

「え」(ヒ)、日向の一部と薩摩、大隅はえ(ヒ)である。何故に重母音「ア、イ」がある地方では「ヤ」となり、ある地方では「エ」となるか、これに答へてくれるものは音韻變化の概念を措いて他にはない。

ai の副音 i が落ち、その代りその音節の頭を口蓋化する傾向をもつ甲の地方に對し乙の地方では同じく副音でその音節を己に近く引き寄せて一つの長音にしたのである丙の地方では更に短音化の傾向がある、甲の地方のは乙、丙の地方より一層強く口蓋化をある種の音節の上に及ぼす傾向を有したのである。

それ故九州地方にてクマガイを發音すれば種子ケ島を除いては全部「クマガエ」「クマガヤ」となるのは明白で、これを果して正しいといへるだらうか、參考に九州地方の「エ」と「ヤ」との分布圖を略す

分布圖は明かに「ヤ」は「エ」に周圍的に馬蹄形に包圍されてゐる。即ち「エ」が壹岐對馬から肥前本土の西端を掠め、天草の一端に頭を出し葦北に上陸して薩摩に入り大隅から日向、豊後、豊前、筑紫と北上してゐる。(依方言研究第四號原田芳起氏「音韻傾向より見たる九州西南方言」)これを以てしても九州地方にては寧ろくまがや又はくまがえが正しいと云へる然しこれは九州だけの話である。